図画工作
Art and Handicraft

「対話的な学び」を具現する授業デザイン例

福島県教育庁相双教育事務所

▶ 学年　小学校　第1、2学年

▶ 題材　カラフルいろみず「A表現」ア　造形遊び

POINT 01 対話的な学びを引き出す教師の仕掛け

教師は、生活科の時間に花びらを使って熱心に色水づくりをしている子どもの姿や、絵の具がついた筆を洗う際にできた色水をじっと見ている子どもの姿などから、子どもたちの色への関心の高まりを見取り、本題材を設定した。子どもの「やってみたい」「こうしてみたい」という感覚や気持ちを生かした題材を設定することにより、活動への意欲を高めることができる。

また、容易に色水づくりができるペットボトルや共用の絵の具などの材料と用具の準備や、できた色水を並べたり眺めたりすることができるように光が差す窓辺の棚の上を空けておくといった場の設定の工夫も、子どもたちの多様で活発な活動と対話を引き出す仕掛けとなる。

POINT 02 対話的な学びの様子

◎　できた色水をよく見たり、友達と比べたりする。

教師「たくさんの色水ができましたね。見つけたことや気付いたことはあるかな。」

児童 A「ぼくの色水も、B さんの色水も同じ赤だけど
ちょっと違う感じがするよ。」

児童 B「A さんの色水の方が、色が濃い。
『つよい色』っていう感じがするよね。」

教師「B さんは濃い色が『つよい色』だと感じたのですね。」

（教師は、子どもが色から感じたことをそのまま受け止め、肯定するようにした。）

◎　できた色水を使ってどんなことができるか考え、活動する。

児童 C「窓のそばの棚に並べてみよう。」

児童 B「たくさんの色があってきれいだね！」

児童 C「これとこれは、青のなかまだよ。」

児童 B「**同じなかまを集めて並べるときは、
こうして色が濃い方から並べるといい感じ。**」

児童 C「**違う色をいっぱい集めて並べるのもきれいだよ。**」

教師「B さんと C さんは色の並べ方を考えているのですね。」

（教師は、色を基に並べ方を工夫する子どもたちの取組や言葉から、造形的な見方・考え方を働かせていることを捉え、活動の展開を見守った。）

児童 B「**少しずつ色が変わっていくように並べたいな。**
黄色からオレンジ、だんだん赤になるように。」

児童 C「**いいこと考えた！
たくさんの色がつながるように並べたら
虹みたいになると思うよ。**」

児童 B「それいいね！一緒にやってみよう。」

―『授業者の視点』―G、M、S

（相双教育アピールより）

子どもが発想を膨らませる時間を十分に確保し、子どもの思考や取組を見守る。指示的になりすぎて発想を狭めたり、具体的なものに見立てさせたりせず、子どもの感じたことをそのまま受け止める教師の姿勢も大切である。

POINT 03 学びが深まった児童の姿

子どもたちは、自分がつくった色水と友達の色水とを見比べ、様々な色の違いに気付くことができた。また、色水の並べ方を考えていた子どもたちは、対話を通してさらに発想を膨らませ、「少しずつ色が変わるように並べる」「虹のような色になるように並べる」といった新たな活動をつくり出していった。

造形遊びの学習では、作品をつくらせる指導ではなく、できる限り子どもの思いを受け止め、子ども一人一人が「これでどんなことができるだろう」と考え、「つくり、つくりかえ、つくる」ことができるように、新しい試みをしようとすること自体を見守ったり励ましたりすることが大切である。そのためには、子どもの取組の造形的な価値や意味を捉える教師の子ども理解、教材理解が求められる。